

S-6

15:20～15:40  
和漢薬資源の現状と展望 ④

## 和漢薬資源の確保に向けて

○御影 雅幸

金沢大学・薬学部・資源生薬学研究室(薬用植物園)

---

昨今、日本漢方で使用される生薬の約9割が輸入品に頼っている。生薬は古来、投機の対象ともなるほどに価格の変動が激しいものであった。それが、最近では中国からの安定供給により、大きな変動がなくなっていた。ところが、最近おきた中国におけるSARSの流行により、その予防薬としての漢方生薬が一般市民に買い占められ、品物が不足して相場が急激に上がり、ある種の生薬は輸入が覚束なくなった。このような思いもかけぬ事態によって、生薬資源の確保にはいつになんでも不安定要素が付きまとつことを改めて痛感させられた。また、最近では中国で野生品マオウとカンゾウの採集規制が始まり、生薬「麻黄」の輸出が禁止された。この機会に生薬資源確保に関して私見を述べてみたい。

○国産生薬の再評価：国産生薬の歴史は古く飛鳥時代にまでさかのぼる。当時中国から微招された採薬師の活躍により見いだされた代用品が日本漢方の基礎を築いてきたことを思うと、国産生薬も十分使用に耐えうるものであったと判断できる。こうした意味で、国産生薬の再評価を行ない、それらの利用をはかり、さらには新たなる資源発掘研究と品質評価研究の進展が望まれる。

○自給率の向上：野生品については、葛根、黄連、半夏、升麻、茯苓、等々、身近に未利用の資源が多くあり、一昔前までは利用されていた。これらは繁用生薬であるので年間消費の全量を国内産でまかなうには無理があろうが、今後は昨今放置されている里山の有効利用をも視野に入れるなどして、自給率の向上をはかるべきであろう。

○稀用生薬の生産：稀用生薬については品質が論議される機会が少なく、市場に良質品が少ないのが一般的である。瓜蒂、藕節、絲瓜絡、補公英、大腹皮など、いつ需要があるか分からぬような生薬は、収益を考えると一般農家の栽培や採集加工は困難である。そこで、全国各地の薬用植物園が適地適作による栽培、あるいは地場の農産物や天産品を利用するなどして、稀用生薬の高品質で安定した供給に寄与することを提案したい。

以上、ことは医薬品に関する問題である。価格のみで流通生薬の産地国が決まり、その結果として必然的に品質が決まるような昨今の状況は異常であると考えたい。今後は最終生産物の品質が論議され、適切な価格設定が行なわれることも望まれる。